



日本ジオパーク再認定審査

現況報告書 2015



男鹿半島・大湊ジオパーク

～半島と干拓が育む人と大地の物語～



男鹿半島・大湊ジオパーク推進協議会

平成 27 年 9 月



目 次

01	第 1 章 概況（はじめに）
02	第 2 章 アクションプランの進捗状況の概要
05	第 3 章 アクションプランや基本計画の改善点とその理由
07	第 4 章 ジオサイトの保全状況および保全活動の概要
08	第 5 章 科学教育、防災教育、環境教育など地域の教育・普及活動の概要
10	第 6 章 研究活動支援状況、ジオパークエリア内に関する学術論文等の新たな研究成果の概要
12	第 7 章 ジオツアー、ガイド団体、ガイドツアーの概要
15	第 8 章 ジオパーク活動におけるリスクマネジメント
15	第 9 章 地域の持続可能性向上への寄与の概要
16	第 10 章 世界・日本のジオパークネットワークへの貢献の概要
17	第 11 章 各種自然災害への対応状況の概要
18	第 12 章 その他、現在の課題と解決方針
19	第 13 章 今後の目標と活動計画
20	第 14 章 まとめ
21	添付資料



第 1 章 概況（はじめに）

男鹿半島・大湊ジオパークは福島県の磐梯山ジオパークとともに、東北地方で初めて 2011 年に認定されたジオパークである。

日本列島の成り立ちがわかる地層博物館・男鹿と、日本で 2 番目に大きかった湖、八郎潟の湖底にできた人工の大地・大湊。恐竜がいた 7,000 万年前から現在までの大地の歴史、人の歴史を連続してみることができる日本唯一のジオパークである。「男鹿のナマハゲ」に代表される歴史や文化、自然、動植物に加え、大地の豊富な恵みが育む食文化とそれらを担う人々の生活など、他のジオパークにはない多様な物語に恵まれている。

範囲は男鹿市と大湊村を包括する総面積 411.2 km²、域内の総人口は 33,080 人（平成 27 年 8 月末現在）となっている。

ジオパーク活動は男鹿市と大湊村が中心となって立ち上げた「男鹿半島・大湊ジオパーク推進協議会（2010 年設立、会長：男鹿市長、副会長：大湊村長）」が主たる運営を担っている。またその事務局は男鹿市教育委員会生涯学習課ジオパーク推進班と大湊村教育委員会干拓博物館が主を担っており、東北地方では唯一の教育委員会が推進するジオパークである。

ジオパーク設立当初は地質関係に特化したジオ

パークであったが、ジオパークそのものが推進する考え方の進展に伴って、ジオストーリーの構築を前提に、大地の成り立ちと人をつなぐ事象として歴史や文化などを多分に織り交ぜたジオパークへと変革をしており、ジオサイトやジオスポットの全面的な見直しを実施した。その結果、これまで当地域が推進してきた大地と人の関わりをより明確化することができたとともに、干拓された大地、大湊村との関係性をより積極的に押し出し、人と大地の調和を重視したジオパークとなっている。新たなテーマを「半島と干拓が育む人と大地の物語」に設定し、他地域にはない、当地域だけが持つ特徴を全面に押し出している。

ジオストーリーの構築に際し、域内の歴史や伝統行事、文化等を所管する教育委員会に事務局があることで、学術研究、保護・保全、そして教育活動の推進についてもより効果的な推進が可能となっている。このことは国内ジオパークの中でもより先進的な取組みの一つであると捉えている。

さらに、これらを伝えるガイドの充実や拠点施設整備、ジオサイトの整備やそれに付随した活用なども含めて、日本ジオパーク認定後の取組も充実してきており、ジオパーク活動は軌道に乗ったと考えている。

第2章 アクションプランの進捗状況の概要

当地域の活動は大きく以下の3つの指針に分けられる。それは、①アクションプランに基づいた活動、②アクションプラン策定時にある程度達成していた事項のさらなる発展と質の向上、そして、③当時は想定していなかった課題に対する独自の活動である。独自の活動については次章で詳細を説明する。

1 アクションプランに基づいた活動

第1・2表にまとめた。アクションプランで提示した事項については概ね達成している。最も大きな課題の一つであった説明板の設置については、景観や可視性を重視し、見境なく設置するのではなく、ジオパーク担当、観光担当、文化財担当、防災担当で個別に作成した説明板の統一化を図った。その結果、市、村内にある関連地内の説明板が同一仕様で統一されて、来客者にとっても、市や村の街づくりや景観向上の推進にとってもより良い方向に進めることができた。説明板には防災に関する情報や保護に関する注意事項なども掲載すると同時に、文字数は300字程度に抑え、写真やイラストを多用し、そこから見えない情報、過去の情報を重視したものを作成した。

また、事務局体制については、市、村ともに教育委員会で担当セクションを統一化し、地域の歴史や文化、植物、防災（過去の災害史）などを多分に反映したジオストーリーの構築に到ることができたとともに、学校教育への効果的な活用が推進されるようになった。同時に、大潟村の大潟草原鳥獣保護区などでは、環境省と連携の上、野鳥観察舎の土日解放など連携が進むとともに、国や県が管理する敷地内への説明板設置などにおいては、ジオパークとしての活動が一定程度評価された結果、優遇措置を受けられることとなった。

しかし、多くの事項は単年度で完結する性格のものは少ないため、今後も継続した上で精査し、さらによりよいものへと更新を試みていく必要があると捉えている。

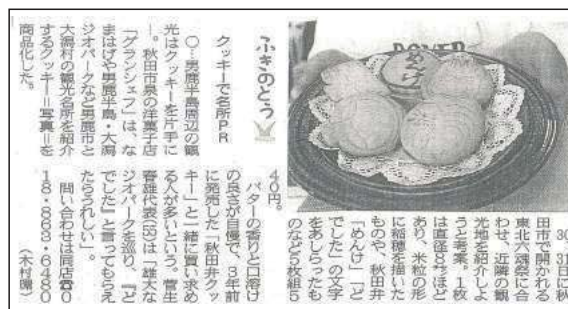
2 アクションプラン策定時にある程度達成していた事項のさらなる発展と質の向上

当地域の地質学的価値は研究史上も、また、認定時の審査結果報告書にも認められていることであり、これらを活かした教育的活用をさらに発展させて推進している。その結果、秋田大学を中心に大学の教養講座として当ジオパークが取り上げられ（川村教一 2015「教養ゼミナール「ジオパーク学入門」実践の成果」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第17号 秋田大学教育推進総合センター）、さらには、これらを踏まえた小中学校の理科教育の野外学習地として広く活用されている。

また、ジオサイトの保全に関連し、各種保護法や保全条例を所管する担当課と連携を密にすることで、研究等における各種法令手続きのワンストップ窓口として定着化しつつある。さらに協議会会員だけでなく、自発的なジオパークを活かしたお土産や商品開発も見られ、商品としての流通が進められている。



写真1 秋田大学の授業によるジオパーク学習センターでの学習



第1図 男鹿半島・大潟ジオパークをモチーフにしたお菓子を紹介する（2015.5.15 付け秋田さきがけ新報）

第1表 アクションプランの進捗状況①

『男鹿半島・大潟ジオパークアクションプラン』(平成24年3月)に追記

①男鹿半島・大潟ジオパークの審査結果に基づく課題の整理と達成年度

No.	項目	課題(下段は主な実施内容追記)	達成年度 (目標)
1	組織体制・ジオパーク運営	様々な地域資源を取り込んだジオストーリーの構築	25
	→ 達成年度: 27 ※ただし、次年度以降も継続精査	申請時には地質一辺倒であったジオサイトの見直しを実施。歴史や文化、自然等を取り込んだ多様なジオストーリーを構築。説明板やパンフレットに反映。文化財や観光パンフレットへのロゴマーク活用	
2	組織体制・ジオパーク運営	キャッチコピーの整備	25
	→ 達成年度: 27	当地域だけがもつ魅力を表現。見直したジオサイトをもとに整備。「半島と干拓が育む人と大地の物語」	
3	組織体制・ジオパーク運営	事務局体制の確立と組織の充実	24
	→ 達成年度: 27	市村ともに教育委員会事務局に事務局を置くことで、社会教育や学校教育、文化財や地域史等の強化。月1回の定例担当者会議の開催により事務遂行の円滑化	
4	ガイド養成・運用	ガイド養成、観光誘致、宣伝における国・県との連携	26
	→ 達成年度: 26 ※ただし、次年度以降も継続実施	ガイド認定の方法を確立し、ジオパークガイドの会立上げ(H27現在、28名)。2か年で約80件、2,500人へガイド実績、有料ガイドとして活動。市村観光パンフレット等でのジオパーク宣伝、教育旅行誘致パンフレットへの協力	
5	組織体制・ジオパーク運営	協議会構成員の役割分担と進行状況の把握	24
	→ 達成年度: 27 ※ただし、次年度以降も継続精査	協議会構成員との業務分担→ジオツアー催行等の法的課題クリア、物販企画・販売、モニターツアーや販促品、県内GP全体のイベント催行など	
6	基盤整備	解説板の新規設置と既存解説板のリニューアル	27
	→ 達成年度: 26・27	ジオストーリーを前提に地質だけにとどまらない内容で整備 総合案内板5基、全ジオサイトに1種以上、総計59基の説明板設置。ユニバーサルデザイン採用と多言語対応、スマートフォンアプリやウェブとの連動	
7	情報発信	解説板、リーフレット、ガイドブック整備の行程表作成	24
	→ 達成年度: 24 ※次年度以降も継続実施、H27更新	H27で完遂(解説板は市と村でデザイン統一)。ただし、今後も増補、改定。目的に応じた情報提供可能な多様なパンフレット等の在り方を検討	
8	教育普及・研究活動	各種生涯学習活動の実施	24
	→ 達成年度: 26 ※ただし、次年度以降も継続実施	博物館活動の推進、学習センターを用いた生涯学習、地域学習 ジオガイド等が依頼を受けたジオツアー総計315回実施	
9	教育普及・研究活動	農業・漁業体験活動の実施	24
	→ 達成年度: 24	しょっつる(魚醤)講習会や地魚検定の実施(NPO法人) 市や村で実施する農・漁業体験やスタンプラリーへの参画とロゴ使用 放課後子ども教室などのタイアップ(収穫体験とジオパーク)	
10	教育普及・研究活動	日本海中部地震に関連するジオストーリーの構築	24
	→ 達成年度: 24・27	津波被害の出た地域及び犠牲者の慰霊碑に説明板設置(ジオサイト見直し) 地震を中心とした防災にかかる展示の充実、災害を乗り越えた村むらを訪ねるモニターツアー(NPO)	
11	教育普及・研究活動	防災教育のプログラム開発と実施	25
	→ 達成年度: 25 ※ただし、次年度以降も継続実施	ジオパーク学習センターを中心とした防災教育プログラム 体験学習メニューの構築と実践(教育研究所一域内で起こり得る災害) NPO法人や大学と連携した実験による教育の充実、大潟小・中学校や干拓博物館での海拔表示と教育活動、日本海中部地震に関する企画展	
12	教育普及・研究活動	ジオパーク活動を防災に役立てる仕組みづくり	25
	→ 達成年度: 27	ジオサイト説明板への防災情報付与、アプリへの防災情報の充実(連携) 県内連携によって設立された専門研究統括会へ防災に関する研究者	
13	教育普及・研究活動	ビジターセンター、資料館、博物館における教育活動	26
	→ 達成年度: 24・27	男鹿市ジオパーク学習センターの開館とリニューアル 大潟村干拓博物館のジオパーク展示の拡充、2館での学校・生涯教育連携	

第2表 アクションプランの進捗状況②

No.	項目	課題(下段は主な実施内容追記)	達成年度 (目標)
14	教育普及・研究活動	全容が伝わる印刷物の刊行	25
	→ 達成年度: 27 ※ただし、次年度以降も継続実施	全体リーフレットの作成(総合と子ども向け) 詳細編を市村で作成、ガイドブックと子ども向け副読本の刊行(NPO)	
15	情報発信	ホームページの改善	24
	→ 達成年度: 24 ※H28改定予定	当ジオパークの公式ページの開設と運用(市と村のHPも整備) 東北地方のジオパークのリンクやジオカード、JGNのリンクなどその都度改定 見直したジオサイトなども反映させて、H28大幅リニューアルを予定	
16	ジオガイドの養成と運用	ガイドの品質管理と養成体制の確立	25
	→ 達成年度: 25 ※ただし、次年度以降も継続実施	認定ガイド誕生(28名)、2年にわたる講座と認定試験 認定後も、認定解除条件の設定と、スキルアップ講座の実施 既存ガイドの認定ガイド団体システムの構築(大潟村案内ボランティアの会)	
17	基盤整備	国や県が管理するジオサイトの見学ルールの確立	24
	→ 達成年度: 26	国設大潟草原鳥獣保護区内の野鳥観察舎を土日祝祭日一般開放(村で管理員派遣、環境省との連携) 誘導板や説明板の設置に際して国や県の協力	
18	組織体制・ジオパーク運営	日本海側のジオパークとの連携による日本海形成史の説明	27
	→ 達成年度: 27 ※ただし、次年度以降も継続実施	秋田県のジオパーク関係地域が連携して、研究助成事業の立上 県内一体となった専門研究統括会の組織化、生物や地質に関する独自調査実施	
19	基盤整備	誘導標識の整備	27
	→ 達成年度: 26・27 ※ただし、次年度以降も継続実施	男鹿半島入口部に導入看板設置、市・村外への誘導板の設置 各種誘導板の既存改修と新設、ジオサイト間連絡道の整備	
⑳	組織体制・ジオパーク運営	東北域内連携の強化	25
	→ 達成年度: 24 ※次年度以降も継続実施	第1回東北ジオパークフォーラムの開催(東北事務担当会議の開催) ※現在第4回へと継続、東北学術会議(鳥海山・飛鳥構想)への協力 県内ジオパークの連携協定(㉒参照)	
㉑	ジオガイドの養成と運用	ガイド交流の促進	26
	→ 達成年度: 26・27 ※ただし、次年度以降も継続実施	秋田県のジオパーク関係地域が連携して、ガイド共通講座の開催(交流) 認定ガイドと大潟村案内ボランティアの会との合同勉強会、交流会 各種ジオパーク関連行事(東北フォーラム、全国大会、ガイドフォーラム等)へ 認定ガイド・認定ガイド団体からの参加	
㉒	教育普及・研究活動	県内連携事業の促進	25
	→ 達成年度: 25～ ※次年度以降も継続実施	秋田県のジオパーク関係地域が連携して、共通化できる事業の一本化 (専門研究統括会、研究助成、ガイド共通講座、普及啓発事業等) 秋田市市内での夏休み子ども向け合同イベント(毎年継続、1回約2000人参加) 県内ジオパークでのフォトコンテスト(秋田県・NPO)	
㉓	教育普及・研究活動	学校教育への活用	26
	→ 達成年度: 25～ ※次年度以降も継続実施	小学校副読本へのジオパーク紹介、理科や社会、防災、総合学習への協力(現地 ガイドや施設見学、実験等の体験学習プログラムの確立、11参照) 教育旅行誘致。市・村内だけでなく、他自治体からの依頼増加(総計172回実 施)	
㉔	教育普及・研究活動	国民文化祭あきた2014への参画・独自事業の推進	26
	→ 達成年度: 26	大規模なジオツアーの催行(協議会構成員である市観光協会との協同)。一般向 け有料ジオツアー。1ツアーバス2台運行の食を兼ねたツアー ジオカードを用いたカードラリーの実施	
㉕	教育普及・研究活動	楽しいジオツアーの企画・運営	26
	→ 達成年度: 26	NPO法人(協議会構成員)によるモニターツアーの実施(2か年で9回、512名 応募あり、抽選)→発展:地球史と食、文化、歴史等を融合したツアーの実施 (市観光協会と連携・旅行業法の順守)	

凡例: ○数字はアクションプラン策定以後の独自追加項目

表内のNPOはNPO法人秋田地域資源ネットワーク(協議会構成員を指す)

第3章 アクションプランや基本計画の改善点とその理由

当地域が日本ジオパークの認定を受けた後も、ジオパークそのものの考え方が進展し、またそれに付随する課題も多くなってきた。そのため、アクションプランに追記し、策定時に想定しきれていなかった独自の取組を追加している。

1 アクションプランの主な改善点とその理由

平成24年3月に策定したアクションプランに追加して実施してきた項目は以下の通りである。それは「東北域内の連携強化」、「ガイド交流の促進」、「県内連携事業の促進」、「学校教育への活用」、「国民文化祭あきた2014への参画と独自事業の推進」、「楽しいジオツアーの企画・運営」である（アクションプランには○番号として追記）。

これらは、他のジオパークにはない、当地域のもつ魅力や特色を十分に押し出すため、さらには、平成28年度から移行する予定のJGNのブロック化を推進する必要性が増したため、準備期間を含めて改善したことによる。主な成果は以下の通りであり、ジオパークとしての土台の強化につながっている。

当地域で第1回目を開催した東北ジオパークフォーラムは、全国に先駆けた広域連携事業であり、現在も継続し、平成27年度で第4回目（三陸ジオパークで開催）を迎えた。東北域内における情報交換だけでなく、ガイド同士の交流促進、他地域の視察、新規認定を目指す地域との情報交換の場として、東北域内で定着した事業となっている。また、これ



写真2 当地域で第1回目を開催した東北ジオパークフォーラム（H24.9.27）

らに当地域のガイドを多く参加させる（例年当地域からは30名程度で参加）ことで、他地域のガイドとの交流により、自分たちのガイド技術の確認や、ガイド方法において切磋琢磨し、質の向上に非常に大きな役割を果たしている。その結果、当地域のガイドは、その運用方法や質、ガイド自身のモチベーション等の点で、国内の他のジオパークと比較しても非常に高いレベルにあると考えられる。

また、秋田県内のジオパーク同志で平成25年度に連携協定を結び（平成27年に鳥海山・飛鳥構想地域加入）、共通化できる事業の一本化やジオパーク域外での広報イベントを推進している。これにより、ジオパークの学術的側面を担う秋田県専門研究統括会の開催（第6章で詳述）やガイド共通講座の



写真3 秋田県ジオパーク連絡協議会調印（H25.12.14）

実施（第7章で詳述）など、単独地域で実施するより、効率的で質の高い取り組みができるようになった。さらには平成26年に秋田県で初めて開催された国民文化祭あきた2014（平成27年度は鹿児島県開催）への参画と独自事業の推進により、ジオツアーを一定の軌道に乗せる機会とした。その際には、協議会会員である市観光協会と連携することで、多くの地域で課題となっているツアー催行における旅行業法の課題改善を達成し、また、これまでになかった店舗や温泉などもコースに選定することで、市村内の店舗の経済効果にも寄与する結果となり、非常に喜ばれる事業となった（第7章で詳述）。

当地域は東北地方で唯一の教育委員会が推進するジオパークとして、学校教育への推進を追加した。

また、学習指導要領を踏まえたジオパークの活用を周知し、域内だけでなく、近隣の小中学校からも見学の依頼が増加している（第5章で詳述）。

これらの取組みをふまえて、ジオパークの事業が非常にうまく回ってきており、全国からの議会等を中心とした視察件数も日本ジオパーク認定後の4年間で約30回と市、村の各部局と比較しても格段に多くなっている。

2 基本計画の改善点とその理由

平成23年9月の審査結果報告書をもとに、平成24年3月にはアクションプランを作成し、それを反映した形で同年4月には「男鹿半島・大潟ジオパーク基本計画」を策定している。

本基本計画における最も大きな改善点はジオサイトの基本的な考え方の構築とそれに付随したジオスポットの見直し、キャッチフレーズの見直しである。

日本ジオパーク申請段階では、当地域のジオサイトの選定は、地球科学的視点に特化しすぎたものであった。しかし、上述したようにジオパークとして

の本来の考え方に即して、持続可能な地域の発展をめざし、自然、歴史、生活、食、文化などを通して、地球の多様な物語を楽しむ場所、そして、それらを体現するためのジオストーリーの構築を前提として、基本的な考え方を整理し、当地域がもつ地域の力を十分に活かせるように改善をした。しかし、当地域の地質学的資産は日本ジオパークとして登録された大きな要因の一つでもあるため、見直しにおいては申請時における基本的な情報は踏襲して作成した。これにより、日本ジオパーク登録要件としての地球科学的価値を損なわず、当地域を代表する文化財である「男鹿のナマハゲ」や「男鹿のまるきぶね」、大潟村の干拓などの人の活動と、大地が残す地球科学的遺産との連続した説明が可能となり、さらには各種法令を援用した保護においても明確な指針を示すことができるようになった。

その結果、22のジオサイト（一定の空間的広がり）と100のジオスポット（ジオサイトの内の個々の見どころ）に再編成し、それぞれにそのスポットやサイトがもつ魅力を分類した。これにより様々な視点からの

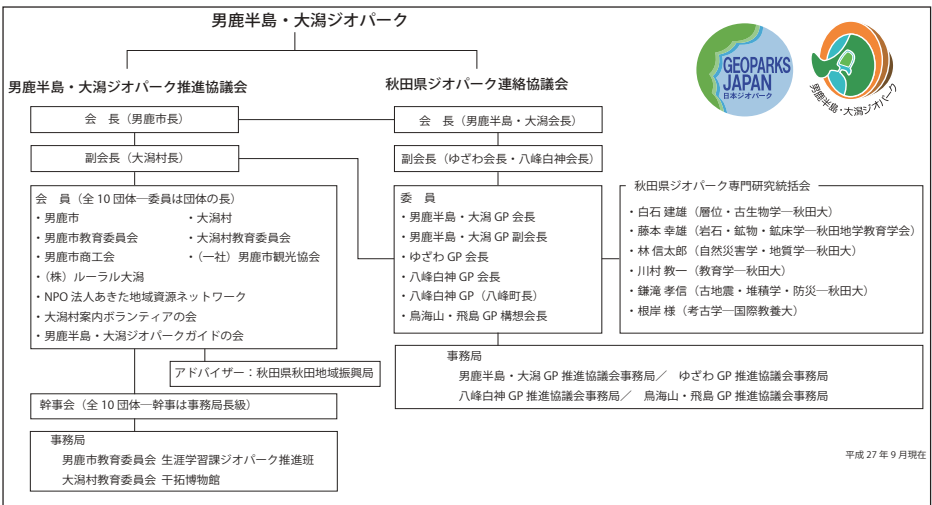
ツアー考案や目的に応じた見学場所の選定などが可能となった。そしてそこから導かれる当地域だけの魅力を一言で示したキャッチフレーズである「半島と干拓が育む人と大地の物語」が抽出されることとなったのである。

第3表 ジオパーク関連予算の推移

単位:円

年度	推進協議会	男鹿市	大潟村
平成24年度	5,619,759	43,642,354	10,102,463
平成25年度	6,739,328	34,034,461	5,782,195
平成26年度	8,394,076	13,363,666	29,435,504
平成27年度	9,352,000	30,770,000	15,028,000
合計	30,105,163	121,810,481	60,348,162

※平成24～26年度は決算額、平成27年度のみ予算額を記載



第2図 男鹿半島・大潟ジオパーク組織体制

第4章 ジオサイトの保全状況および保全活動の概要

1 ジオサイトの保護—法的保護と価値付けによる保全

ジオサイトの保全については、ジオパーク活動の最も根幹となる活動として重要視している。

ジオサイトの多くは文化財保護法や自然公園法、鳥獣保護法、県や市の文化財保護条例等により、改変等に際しては法的に保護されている。法律的に保護されていない場所についても、大潟村の維持に関する施設など、永続的な機能が約束されているところも多い。さらには、民間で選定する百選などに積極的に応募し、選定されることで知名度の向上を図り、保全への理解が進むことが期待されることから、市村や協議会で推進している（実績は第4表参照、日本の奇岩百景は総計17か所が登録された）。そのため、対象ジオサイトやジオスポットの説明板に、それらの付加価値を強調して記載するよう努めている。

これらの活動結果、ジオサイトとしての認知が進んできたことから、秋田県などが施工する漁港や港湾の修繕工事時に、ジオパーク事務局へ事前の連絡が入り協議される案件が増えることとなった。同時に、ジオスポットへの影響に配慮した工法を提案されたり、事務局からの要望が反映され、結果として、見学環境が向上したジオサイトも増加してきている。

また、地形改変行為等に際しては、ガイドによるツアー時の見周りや秋田県が委嘱する文化財保護管理指導員、日本自然保護協会の会員で、県自然保護

課とも関わりの深い自然観察指導員などとも連携して各担当に報告があがり、ジオパーク担当にも報告されるシステムが構築されている（ガイドの中に自然観察指導員を兼ねている者も複数いる）。

同時に持続性を保つための取組として、当地域では自然公園法をもとに、ツアー等における化石や岩石を採取することを主目的とする行程は組まないように配慮している。研究目的においても、内容如何では法令担当課及び県などとも協議し、しかるべく手続きを経るよう誘導している。

2 ジオサイトクリーンアップと環境整備

具体的な保全活動として、クリーンアップを実施している。当地域のジオサイトは沿岸部に多く点在しており、海岸漂着物等を収集して良好な環境を保つために、毎年9月5日（日本ジオパーク認定の日）前後の日程で、ジオサイトのクリーンアップを実施している。市と村のゴミ処理については事務組合が同一ということもあり、クリーンアップ実施時には、市や村のゴミ処理担当課から人的、物的協力をもらって実施している。その他には、男鹿市、大潟村ともに春先の一斉清掃が行われている。近年ではジオパーク活動の一環として、「大潟村の自然を愛する会」などが自主的にジオサイトの清掃活動を実施しており、協議会が先導しない活動も活発化してきている。

さらに見学環境を向上させる目的で観光振興部局と連携して、夏季を中心にジオサイトの草刈りを実施している。

第4表 認定後に選定された民間の百選等

年	月日	民間認定名称	認定物件のあるジオサイト	認定元
2011	9月5日	日本ジオパーク認定		
2011	-	日本の地質構造100選	鵜ノ崎海岸ジオサイト	日本地質学会
2011	9月16日	選奨土木遺産	船川港築港ジオサイト	土木学会
2014	10月31日	日本の奇岩百景	潮瀬崎ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構
			館山崎ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構
2015	4月11日	日本の奇岩百景	鵜ノ崎海岸ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構
			男鹿温泉郷ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構
			入道崎ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構
			加茂青砂ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構
			西海岸ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構
			潮瀬崎ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構
			館山崎ジオサイト	非営利活動法人地質情報整備活用機構



写真4 安田海岸ジオサイトのクリーンアップ

第5章 科学教育、防災教育、環境教育など地域の教育・普及活動の概要

当地域は東北地方では唯一、事務局を教育委員会で担っているジオパークであり、学校教育、社会教育を中心に最も重視している分野である。

1 学校教育

学校教育への積極的な活用のため、市教育研究所、理科教員などとともに作成した体験プログラムの確立や小学校副読本でのジオパークの紹介、市、村内全ての小中学校でのジオパークを活かした教育の推進を学習指導要領に沿った形で進めている。その結果、市内だけでなく、近隣の学校からも理科や社会、総合学習や防災学習等、種々の科目における野外学習地として利活用されている。このようなことから、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正に基づく「男鹿市教育大綱」にもジオパークを活かした教育の推進が位置づけられることとなった。

また、男鹿市では国立大学法人秋田大学と「ジオパークを通じた地域振興」を目的とした連携協定を締結している（2011年2月）。これは日本ジオパーク認定後も継続しており、その協定に基づく活動の一環として、秋田大学教員の協力や指導のもと、合併した旧町の庁舎の議場を改修した「男鹿市ジオパーク学習センター」を平成24年8月に開館した。この施設は現在、大潟村干拓博物館とともに、男鹿半島・大潟ジオパークの拠点施設として位置づけている。ジオパーク教育の拠点施設として両館で平成24年36校、平成25年59校、平成26年49校、平成27年9月まで16校が訪れている（添付資料①参照）。この数字は男鹿市、大潟村合わせて、小中学校が13校であることから非常に大きな数字であることがわかる。これらは学習指導要領や教科書に沿った体験学習プログラムを立案し、担当教諭との密な連絡調整を行った上で、授業目的に応じた見学行程を提案していることによる。さらに現地ガイドも無償で行っているため、地層の堆積や堆積岩の学習（小6理科）、火山や火成岩の学習（小6・中1理科）、歴史学習（小6社会）、地域学習や防災学習（小3総合学習）などで活用いただいている。これらのことから、1度来館があると、継続して来館する学校が多く、

継続性が高くなっている。また、男鹿市内の学校についてはジオパーク教育、地域学習におけるバス借上げを予算措置（学校教育課）して交通手段を確保するとともに、主として小学3・4年生で使用する副読本にもジオパークを掲載して、授業で扱いやすくしており、ジオパークは学校からも歓迎されている。

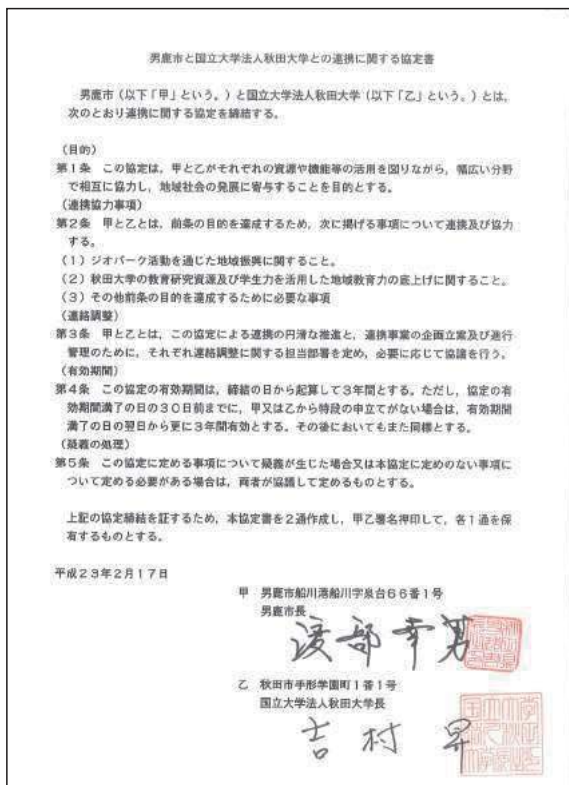
大学教育でも近年着目されており、大学の授業などで、当ジオパークが取り上げられ、大学生による利活用も増加している（第6章詳述）。同時に教員免許講習の開催地として、大学と連携して当ジオパークにて講座を開催することも多くなり、受講した教員が現場に戻った際の野外学習地として選定されることもあり、教育分野での推進が軌道に乗っている。この大学との連携は、職員の採用にも関連している。上述した秋田大学との連携協定における教育の一環で、秋田大学の林信太郎教授とともに、男鹿市ジオパーク学習センターにて子ども向けのジオパーク体験学習を実施した学生（平成24.12月当時）が、それをきっかけとしてジオパークに興味を持ち、その熱意で男鹿市に職員として採用され、現在ジオパーク事業の一翼を担っている。

2 社会教育

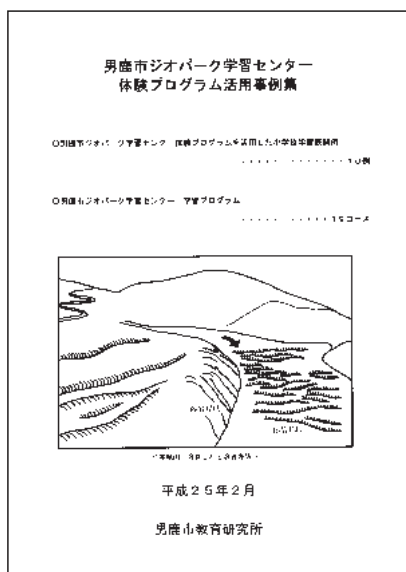
大潟村干拓博物館や男鹿市ジオパーク学習センターでのジオパークを用いた社会教育活動も博物館活動の一環として実施している。地域の公民館の研修や町内会活動の一環、福祉施設や高齢者学級での視察が多い。地域の顔役となっている方々へジオパークを広めることで、地域と関わる事業の際にはとても良い方向で進む。また、他の地域からの研修も受け入れている。さらに、大潟村では干拓地という特性から肥沃な土壌が全域に広がっており、ジオ（大地）の恵みを受けた水田環境では多様な生態系が形成されている。それらを活用した生き物観察会や、農業、自然を絡めたジオパーク学習会を実施している。平成27年度からは地域おこし協力隊を採用し、ジオパーク専任としてそれらの業務を担っている。さらに男鹿市では文部科学省が推進する放課後子ども教室の一環として、ジオパークを取り上げ、収穫体験等と関連させた事業を実施している。



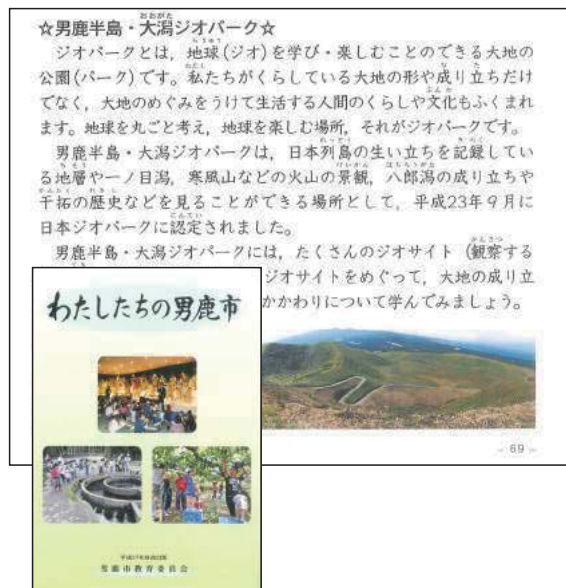
写真5 小学校の授業での学習風景



第3図 秋田大学との連携協定書 (H23.2.17)



第4図 体験プログラム事例集



第5図 副読本『わたしたちの男鹿市』



写真6 教員免許講習受入（秋田大と連携）



写真7 秋田大との連携による子ども向け講座

第6章 研究活動支援状況、ジオパークエリア内に関する学術論文等の新たな研究成果の概要

1 研究活動支援

平成 27 年度より「秋田県ジオパーク研究助成事業」を実施している。これは地域内のジオパーク関連学術分野における基礎研究の向上を目的として、秋田県にあるジオパークと構想地域で連携して実施している事業である。近年、単独のジオパークでの研究助成事業は多くのジオパークで行われているが、複数のジオパークが連携して行うことで、研究対象フィールドの広がりや研究テーマの深まりに進展することを想定して、県内ジオパーク関係地域の合意のもとに事業化に至っている（各協議会の負担金によって事業化）。また、公募研究対象テーマも地球科学だけでなく、考古学、民俗学、地域活性



写真8 秋田県ジオパーク連絡協議会で連携して運営する専門研究統括会

化に関する分野など幅広く設定したことで、環境経済学分野や文化人類学、さらにはジオパーク地域を比較研究する内容の申請もあった。これらの成果が蓄積されることにより、説明板への反映や、ガイドへのスキルアップ講座の充実など、長期的視点での活用が期待できる。さらには、全国レベルでの研究促進が期待できる事業でもあり、今後は東北ブロック全体で実施できるような発展的試みも模索している。

また、ジオサイトの保全とも関連するが、ジオパークとして認知度が向上するにつれて、研究目的の問い合わせもジオパーク担当に来ることが多くなっている。その際には、安直に担当課へ回すのではなく、各種保護法や保全条例を所管する担当課と連携を密にすることで、研究等における各種法令手続きのワンストップ窓口として定着化しつつある。このことは手続きの簡略化や一本化という点において、研究者の負担を軽くすることができ、知らない間の法令違反等の軽減につながっている。

2 新たな研究成果の概要

日本ジオパーク認定以後に当地域で発表された論文等は非常に多いが、ジオパーク活動を推進する上で、特に注目される5つの視点に着目して記す（詳細な文献一覧は添付資料を参照のこと）。

第5表 平成 27 年度秋田県ジオパーク研究助成事業採択研究一覧

No. 研究テーマ	申請者	交付決定 対象ジオパーク
1 秋田県男鹿半島におけるタフォニ、ナマポットホール地形の分布と分類及び風化プロセス、形成速度の解明	秋田大学国際資源学部	若狭幸 170,000 男鹿半島・大潟GP
2 秋田県にかほ市内の高速道路建設工事に伴い出土した埋もれ木の特性解析と保存手法について	秋田県立大学 木材高度加工研究所	栗本康司 170,000 鳥海山・飛島構想
3 菅江真澄の記録したあきたのジオパーク		永井登志樹 150,000 4地域
4 男鹿半島・大潟ジオパークにおける地形ジオサイトの発掘—第四紀の気候変化・海面変化によって形成された地形に関する研究—	弘前大学教育学部	小岩直人 170,000 男鹿半島・大潟GP
5 自然資源から文化資源への意味転換過程についての文化人類学的研究：秋田県内ジオパークの比較研究	秋田大学国際資源学部	田所聖志 170,000 八峰山・ゆざわGP

①大潟村史の刊行

大潟村史は平成 26 年に開村 50 周年を迎えた大潟村が平成 21 年度より進めてきた編纂事業の集大成である（大潟村 2014）。既存の自治体史とは大きく異なり、旧八郎潟の成り立ちや干拓事業の詳細、自然や各団体の歩みだけではなく、開村した昭和 39 年から平成 25 年までの 1 年単位での記述がなされる画期的な村史である。

今後の自治体史の在り方にも一石を投じるものであり、男鹿半島・大潟ジオパークの中核エリアの一つである大潟村をめぐる干拓の歴史と社会背景を知る上で欠かせない極めて重要な成果である。

②地質学研究の蓄積

ジオパーク活動において、そのベースとなる研究は地質学分野の研究である。特に当地域のツアー等で人気のある潮瀬崎ジオサイト（白石 2012・渡部 2014）や鶴ノ崎海岸ジオサイト（渡部 2015）、入道崎ジオサイト（鹿野ほか 2012）における研究成果が著しい。これらの成果により、形成年代の解明や形成過程の要因などが明らかになってきている。潮瀬崎ジオサイトで最も人気が高く、男鹿市の重要な観光資源にもなっているゴジラ岩などは、これまで漠然と波や雨、風による風化と説明されてきたものが、塩類風化による形成であることが明らかとなり（渡部 2014）、ガイドの解説にも反映されている。

③一ノ目潟の年縞資料に関する研究の進展

国の天然記念物である一ノ目潟は、八望台ジオサイトの重要なスポットであり、1 年ごとに堆積した湖底堆積物が地球環境変動史や災害史について

年単位で分析することが可能な資料として着目され、2013 年には国内最深度までの掘削（108m 掘削、約 60m で約 6 万年分の年縞採取）が行われた（男鹿市教育委員会 2013・山田ほか 2014・篠塚ほか 2015）。その分析結果の詳細について早期公表が望まれている。

④歴史学的視点からみた男鹿半島・大潟ジオパークへの援用

江戸時代後期に東日本を旅した菅江真澄は、男鹿半島の自然や景観を多くの図絵に描いており、それらは今もそのまま観察できる。江戸時代にはジオパークとしての土台が築かれていたことが指摘できる（永井 2013）。さらには、男鹿のナマハゲや遺跡、近代遺産などの文化財と地球科学的遺産をつなぐジオストーリー試論が示されるなど、文化財との関わりも指摘されてきた（栗山 2013・五十嵐 2016）。

⑤教育学的視点からみた男鹿半島・大潟ジオパークへの活用

学校教育への実践として、秋田大学を中心にジオパークを活用した教養ゼミナールが開講され、その成果が報告されている（川村 2014・2015）。また生涯学習の活用の実践例として大潟村干拓博物館の取組みを中心に、ジオパークを核とした生涯学習、博物館教育の点からの考察がなされており（薄井 2012・2014）、教育分野におけるジオパークの議論が増加するとともに、その実践地として当地域が積極的に活用されている。

※文献一覧は添付資料⑦参照のこと



写真 9 年縞調査の報告会



写真 10 近年の研究成果の一部

第7章 ジオツアー、ガイド団体、ガイドツアーの概要

1 ジオツアーの催行

ここでは、協議会が主体となり進めたツアーについて記載する。

当地域のジオツアーは認定前から当初にかけて、地質めぐりのなツアーが主体であったことが否めなかった。しかし、平成24年度以降は歴史や文化、食も取り入れたモニターツアーを実施し、平成26年度には国民文化祭あきた2014男鹿市実行委員会と連携して、有料のジオツアーへと発展させることができた（添付書類②参照）。本来の意味でのジオツアーに進化させたということができる。これにより、全国的にもより広くジオパークを広めることができたとともに、ツアー催行時に課題であった旅行業法を遵守するため、協議会構成員である市観光協会と連携して進めることで、法的課題を改善することができた。同時に、これまでジオパークとの関わりの薄かった他市町村の方々や年齢層への周知を目的に、「楽しいジオツアー」を本格的に検討し、食や文化を融合させたジオツアーを催行することで、有料ジオツアーにも関わらず、1ツアーで大型バス2台運行という大盛況のツアーも開催できた。食などをテーマにすることで、結果として市内店舗等との連携強化となり、参加者からも、それを受け入れる店舗からも喜ばれるツアーへと発展した。

また、推進協議会構成員であるNPO法人あきた地域資源ネットワークが秋田県と連携して独自に進める「漁船でめぐる男鹿のジオパーク」も、地元の



第6図 ツアー募集のチラシ

漁師の解説のもと、絶景を海から見る可以作为として、有料ながらも実績が増加してきている。

2 男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会と大潟村案内ボランティアの会

当地域には男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会が養成、認定したガイドによって組織され、平成26年度から本格的な活動を開始した「男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会」（基本的に有料ガイド）と大潟村への第1次入植者を中心に組織され、平成14年から活動をしている「大潟村案内ボランティア

男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会

設 立	平成26年5月設立 ※H27.9 現在、28名在籍 ※年会費2,000円（保険料を除く）
組 織	会長1名 副会長2名 役員7名 顧問4名（有識者） ※会として推進協議会員となっている
方 針	男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会会則 五箇条のジオ誓文
活 動	①依頼型有料ジオツアー（随時） ②主催公募型ジオツアー（不定期） ③ガイド研修会（月1回） ④地域住民との交流会 ⑤依頼型無料出前講座

大潟村案内ボランティアの会

設 立	平成14年4月設立 ※H27.9 現在、28名在籍 ※年会費3,000円（傷害保険加入）
組 織	会長1名 副会長2名 役員4名 ※会として推進協議会員となっている
方 針	大潟村案内ボランティアの会会則
活 動	①干拓博物館無料案内（保険料別） ②干拓地内の無料案内（保険料別） ③大潟村内のジオサイト案内（保険料別）
その他	ジオパーク認定ガイド団体登録済

第7図 ガイド組織の概要

アの会」(基本的に無料ガイド、入館料・保険料別)がガイド活動の中心を担っている。いずれも推進協議会の会員となっており、後者は特に推進協議会の認定ガイド団体として位置づけ、協同してそれぞれの特技を活かしながら分担してガイドを実施している。前者は事務局を男鹿市教育委員会が担い、会員数 28 名、後者は大潟村干拓博物館が担い、会員数 28 名で組織されている。いずれも協議会事務局が関係しているため、連携が取りやすく協力しあっている。各種 JGN の大会等には合同で参加し、認定ガイドを対象とした推進協議会主催のスキルアップ講座でも、一部参加を促したりするため一緒に活動する機会は多い。さらには、年 1 回両会独自に合同勉強会を開催し、意思疎通を図っている。同時に、両方の会を兼ねているガイドもあり、それらのガイドが中心となって橋渡し役を行っているため、両者ともに円滑な運営が可能となっている。

当推進協議会が認定するガイドの養成については、2 か年の期間をもって養成し、認定試験の合格が条件となる。そのため、ガイド 1 人 1 人が誇りを持って活動をしている。また、ガイド運用の開始と同時にガイド依頼の受付からガイド当日、また、その様子、依頼者の感想などをガイドの会に反映させるマニュアルを作成し、質の向上を図っている。現

在までのところ、これら前提条件の整備により大きな事故もなく、依頼件数も増加傾向にあり、円滑に運営されている。さらに、県内ジオパーク関係地域のガイドとの交流促進を図り、皆で一緒に向上していくために、秋田県ジオパーク連絡協議会で、各協議会で個別に実施しているガイド講座の 1 回を共通開催とし、全てのガイドに共通するリスクマネジメントや方法論と一緒に学ぶ講座を開催する。これを年ごとに各ジオパークの持ち回りとし、県内ガイドの交流を促進する。

3 ガイドによるジオツアー

ガイドによるツアーの詳細一覧は添付資料の②を参照されたい。また、前節にも記したが、両ガイドの会ともに、依頼からガイド当日にかけては、一定のマニュアル化を図っている。特に、依頼者の旅の目的や行ってみたいところを聞き取った上で、道程をふまえて、日程案を提案している。多くの方はウェブ等で見どころに見当をつけて連絡してくるものの、各スポット間の移動距離の目算などが困難なため、このシステムは非常に喜ばれており、「丁寧に対応していただいた」という声がアンケートなどでは多い。また、依頼者の求めに応じて、バスに同乗してガイドを行うことや、現地集合、解散などその都度弾力的に運用している。基本的には来客者の意図を優先して満足度を高めるよう努めている。現状では地質、歴史、文化、伝統行事、食、自然なども織り交ぜながら、質の高いガイドを提供するに至っている。

また、男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会を中心に、有料の依頼型ジオツアーだけでなく、独自の取り組みも展開しはじめた。主催の公募型ツアー(ただし、バス等は用いないもの)、地域住民との交流会、依頼型の無料出前講座等を独自に開催してい

ガイド認定システム (H24 運用開始)

認定者：男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会長
認定方法：2 年間の講座(全 14 回)受講+認定試験の合格

◆認定スケジュール(※随時公募していない、一斉公募)

1 年目 初級講座(全 7 回)受講
※3 回の欠席で認定資格の喪失
※基礎的な講座内容

2 年目 上級講座(全 7 回)受講
※3 回の欠席で認定資格の喪失
※模擬ガイド等の実践的内容

認定試験
※80/100 点以上で合格、監修あり

ガイド認定式
※即日ガイドの会へ入会
※認定ガイドの認定証・名札・帽子・ジャンパー・ポロシャツ



実績 平成 25 年度認定式(13 名認定)
平成 26 年度認定式(15 名認定)
平成 27 年度初級講座開始
※認定は平成 28 年末予定

喪失 2 年間ガイド実績がない場合認定資格喪失

第 8 図 ガイド認定システム

第 6 表 認定ガイドを活用いただいたお客様の声

ガイド満足度	とても満足	満足	普通	やや不満	不満
知識	13	12	0	0	0
分かりやすさ	11	11	2	0	0
双方向のコミュニケーション	11	13	1	0	0
安全管理	11	9	1	1	0

ガイド案内への感想	楽しかった	勉強になった
	7	9

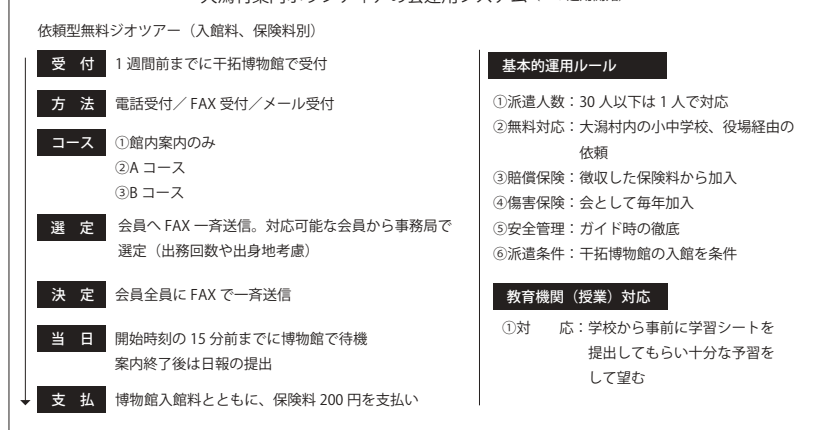
依頼時の窓口対応	とても満足	満足	普通	やや不満	不満
	12	9	0	0	0



る。これらの取組が、ガイド依頼件数の増加につながっている。また出前講座等は福祉施設等を中心に、実際に外を歩くことが困難な方々へもジオパークの魅力を知っていたく目的でガイドの会が独自に行っている。会員の中には昔語り（昔話）を得意としている会員もあり、ジオサイトと関わりの深い伝説等を紹介したり、写真やイラストなどを使って話すことで、好評を得ている。

さらに、大潟村案内ボランティアの会は、昭和 39 年に発足した当初から、村づくりに実際に関わってきた入植者 1 世中心となって組織されたため、ガイド自身の経験がそのまま大潟村の歴史となっており、感銘をもってガイドの話を聞く方が多い。それが最も特徴的な売りとなっているため、人気が高く、干拓博物館の案内や干拓に関わる多くのジオスポットの案内を行っている。

大潟村案内ボランティアの会運用システム（H26 運用開始）



第 9 図 ガイドの運用システム



写真 11 国民文化祭で行ったジオツアー



写真 12 認定ガイドによる依頼型ジオツアー

第8章 ジオパーク活動におけるリスクマネジメント

当地域のリスクマネジメントはいくつかに分類される。一つは、ガイド付ジオツアー時の来客者のケガである。これについては、注意喚起、安全管理を徹底してガイドから伝えるとともに、毎回のガイド時には、マイクとともに救急セットも持参している。さらには、地区消防署による救命救急講習の受講を講座に組み入れ対応するとともに、男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会は賠償責任保険へ加入し、大潟村案内ボランティアの会では傷害保険と賠償責任保険へ加入している。また、ガイド依頼の受付時にツアー保険の加入の確認を必ず行い、加入を促すとともに、免責事項を伝えている。悪天候の際には、来客者とのコミュニケーションを密にとり、来客者の健康状態をみて、足場の悪いジオポットの見学を車窓見学に切り替えるなど、ガイドが柔軟に対応できるよう努めている。

他のリスクとして、ツアー時の災害が挙げられる。東日本大震災を経て、当県全体の死者はなく、他地域に比べ被害は小さかったものの、過去の地震等では津波も発生し、死者が出ている。これらについては各スポットの説明板に標高や津波注意喚起を掲載

するとともに、過去の災害を示す場所をジオスポットとして位置付け、市村ともに説明板等に過去の災害の様子や被害を掲載することで、注意喚起を促している。またジオサイトにおける避難場所誘導の看板の徹底を防災担当部局とも協議し、平成27年度から事業化している。同時に、男鹿市ジオパーク学習センターでは秋田大学の協力のもと、地震発生のメカニズムや災害関連資料、災害に備えるためのコーナーを設けて展示しており、地域の防災学習の一助を担っている。

その他、推進協議会が実施する事業である、ジオサイトのクリーンアップや各種講座、ツアー時にはレクリエーション保険等に加入している。特に懸念されるガイド時のリスクについては、ガイド個人が賠償責任を問われることがないように、ガイドの会の事務局を推進協議会事務局（男鹿市教育委員会）が担うことで現状対応している。これらリスクの問題については、今後もより良い方策を探索していく所存である。

なお、ガイドの安全管理徹底もあることから、現在までに大きな事故は発生していない。

第9章 地域の持続可能性向上への寄与の概要

大潟村は全国的に見ても、大規模農業経営等により後継者も充実し、秋田県内では財政的にも人口問題としても、充実した自治体であることが指摘されている。しかし、男鹿市では人口減少などは喫緊の課題となっている。

地域の持続可能性向上のため、当地域が積極的に推進しているのは、教育と関わる交流人口の拡大（特に子ども）である。子どもの数が少なくなってきた現在では、どこかで子どもの声が聞こえるという事実だけで、街全体が明るくなった雰囲気を出す。そのため、男鹿市観光協会などと連携して教育旅行の誘致を行っている。毎年、旅行代理店や学校教員を中心としたツアーを実施（その際は認定ガ

イドが案内）し、さらには、誘致に関する体験学習を紹介するパンフレットにジオパークを大きく取り上げ、学習に寄与する情報を掲載している。そこには、ジオパークと関係し理科、社会、防災、生活に関するツアー等を紹介している。また、予備学習なども踏まえ、大潟村干拓博物館と男鹿市ジオパーク学習センターも紹介している。その結果もあり、ガイドの依頼は既に平成28年度（教育旅行は通常、実施年の前年には確定される）の依頼も数件入っている。

教育旅行1件の受け入れは、地域経済へも大きく貢献する。100人単位の旅行が多いため、宿泊1泊でも経済効果は大きい。持続可能性向上には一定

の経済性も欠かせないと考えている。また、食を中心として、店舗を活用したジオツアーにおいては、食べ歩きとして、市内の各店舗を 80 人程度で回り、大地のめぐみを試食（1 人単価 100 ～ 200 円程度）しながら、ジオサイトをめぐる食べ歩きツアーを開催したが、それ以外のお土産の購入、ツアー後の再来店を含めて、店舗からも高評価を得た。これらにより、店舗へもジオパークを印象づけることができたとともに、利益へとつながることで、地域経済へ良い相乗効果が生まれた。これは、店舗による独自土産の開発も例外ではなく、ジオパーク関連商品を開発し、販売し始める店舗もわずかながら出始めている。メニュー開発も進んでいる。ホテルサンルール大潟では、8 階のモーレンで「洋食ジオパークランチ」、1 階のコメットで「中華ジオパークランチ」が提供されており、さらに、「ジオパークの間」という部屋が設けられた。また、ポルダー潟の湯では「ジオパークセット」が提供されている。

また、地域の持続には地域の人の意識が最重要課題である。そのためにはガイドの依頼促進が重要であり、推進協議会としても雑誌やラジオ等に広告を出して周知しているとともに、県内で人の出入りの多い、イオンや秋田空港、秋田港のフェリー乗り場等にもパンフレット掲示を協力していただき、周知するよう努めている。

さらに、ガイド自身の広報だけでなく、ガイド自身が近隣者への口コミの重要性を指摘し、独自の集客を始めたり、地域の公民館などでジオパークを広めるための草の根活動を行ったりしている（詳細は第 14 章まとめ参照）。それに呼応するように、大潟村盆踊り大会の際に、独自に手製ののぼり旗をつくってジオパークの宣伝をしてくれる団体が出るなどの活動が活発化してきており、これらが地域の

活性化に役買っていることは間違いない。今後これらの活動が進み、大きくなることで、より良いジオパーク、より良い地域へと考えている。



第 10 図 教育旅行誘致のためのプログラム集



写真 13 旅行代理店や教諭へガイド自らアピール



写真 14
ポルダー潟の湯で提供されている「ジオパークセット」
850 円



写真 15 大潟村盆踊大会の様子

第 10 章 世界・日本のジオパークネットワークへの貢献の概要

ジオパークネットワークへの貢献については、当地域の活動全てがジオパークそのものの質の向上、認知度の向上に寄与しているものと考えている。毎年全国各地で開催される大会を盛り上げるため、また当地域の質を向上させるため、認定以後の各種大

会等へは積極的に参加するように努めている。参加に際しては、協議会会長、副会長（首長）は当然のこととして、事務担当者や認定ガイドなど、現場でジオパークの運営に携わる職員等も積極的に参加するように努めてきた。さらには、協議会構成員の参

加を促したり、ジオパークを運営していく上で今後の関わりを求める県の参画などを推進してきた。また平成 25 年度から当協議会の会長が日本ジオパークネットワークの理事に就任し、ジオパークネットワークそのものの運営に携わっている。

また、平成 24 年には全国に先駆けての広域連携事業である、第 1 回東北ジオパークフォーラムを開催し、現在も継続されているとともに、東北ブロック化へ向けた広域連携のさきがけとなった。県内連携においては秋田県ジオパーク連絡協議会の呼びかけやその会長職へも就任し、事務局を当地域で担いながら、ジオパークを目指す地域への協力（平成 27 年より鳥海山・飛島ジオパーク構想推進協議会が加入）や、県内連携事業（全国のジオパークで初の取組事例）の先導的の役割を担っている。

また、ジオパーク間の交流活動についても積極的に推進し、他のジオパークへの取組事例発表や、視察受入、県内ジオパークガイド講座の講師、各種イベント等における協力、ホームページでのリンクなどを実施してきた（交流活動一覧については添付資料の 6 を参照のこと）。同時に、市村のジオパーク拠点施設として位置づけている男鹿市ジオパーク学習センターと大潟村干拓博物館において、全国のジオパークを紹介するコーナーを拡充し、ジオパークそのものの周知に取り組んでいる。

近年では海外との独自交流も増加傾向にある。教育旅行として韓国ソウル高校の受け入れ（ジオパー

クをめぐるとして認定ガイドが案内）や、ジオスポットとしている「なまはげ館」を中心として、ユネスコのジャカルタオフィスとアジア太平洋無形文化遺産研究センターの依頼で、アジア地域の無形文化遺産の保護事例紹介を目的に、東ティモール共和国の行政官を受け入れたり（Yusuke IGARASHI2013）、Don Van Karst plateau Geopark を有するベトナムで、無形文化遺産の保護と活用を目的に「男鹿のナマハゲ」事例発表、ワークショップ参加を依頼されたりと、ジオパークと関連する国際貢献も増加してきている。



写真 16 ソウル高校の教育旅行



写真 17 東ティモール行政官の視察受入

第 11 章 各種自然災害への対応状況の概要

ジオパーク推進協議会として、ジオパークの活性化を目的とした災害派遣は行っていない。しかし、東日本大震災直後、男鹿市や大潟村では地方自治体として、避難所運営等の支援に職員派遣や食料支援を行った。さらに、男鹿市では平成 26 年度末まで土木技師を中心に、継続的に職員を派遣し支援活動を行っていた。秋田県は東北地方で唯一死者がなく、太平洋沿岸部と比べて被害は著しく軽かったためである。

また、沿岸の男鹿市では東日本大震災以後、大きく見直した津波ハザードマップを作成、全世帯へ配

布したり、津波避難誘導の充実、標高表示などを防災担当で実施している。ジオパーク活動の一環としたものは、第 8 章のリスクマネジメントとも密接に関わるが、説明板への過去の災害の紹介や防災情報の表示、拠点施設にて防災を大きく取り上げるなどの対応をしている。さらに、北海道地図株式会社が提供するスマートフォンアプリ「ジオパークぶらり」に参入し、ジオサイトやジオスポット、観光や文化財情報だけでなく、避難所や避難場所も位置情報を掲示し、日本語だけでなく英語も合わせて公開している。

第12章 その他、現在の課題と解決方針

1 課題の抽出

日本ジオパーク認定後の4年間は、地域そのものにジオパークを広めること、説明板の整備等の基盤体制の強化や県内連携を重視してきた。その結果、全国のジオパークと比較して、以下の課題が明確となった。

- A 全国のジオパークへ向けたアピールが弱い
- B 東北外のジオパークとの連携不足
- C ジオパーク＝地質という固定観念がまだある
- D 東北全体でみても、ジオパークと関わりが弱い市町村への周知が不足している
- E 東北連携、県内連携の際の地理的広域性の短縮
- F 交流人口のさらなる拡大と商品開発の促進

2 課題の解決方針

課題Aについては、当地域の活動の中には、全国のジオパークと比較しても先端にある取組もある（ガイドの体制や維持、文化財を活かしたジオストーリーの構築、ジオパークを対象とした研究者へのワンストップ窓口化、保全への考え方や方法論等）。これらを積極的に周知し、様々な機会を発信していく（全国大会やJGN各種大会でのポスターセッション、ホームページ、JGN活性化部会等）。課題Bについては、当地域の強みや特徴を活かして、東北地域にだけにとどまらない広域連携を模索している（教育委員会で推進するジオパーク間の情報交換—佐渡ジオパーク等、地域の歴史分野を重視したジオパーク間での情報交換—白滝ジオパーク等）。課題Cについては、地質情報に特化しているWebなどにも要因があると考えられるため、Webの在り方を一新し、より分かりやすいものを再構築し、パンフレットなどの記載方法も工夫を重ねていく（既に実践的にモデルコースを記載した子ども向けパンフレットを制作済）。課題Dでは、NPO法人あきた地域資源ネットワークとの連携や秋田県との関わり強化を推進し、秋田県ジオパーク連絡協議会の積

極的活用により拡充を図る。秋田県とNPO法人が主催する「夏休みはあきたのジオパークで遊ぼう！」は秋田市での開催であるが、1日で2,000人の親子の参加がある。さらには、ジオパーク地域隣接市町村での講座の開催も進めている。また、秋田県ジオパーク連絡協議会では、ジオパーク地域以外の行政担当者向け説明会などを予定しており、一定の進展を見せている。それらのさらなる拡充を図る。課題Eについては、地理的広域性が問題となっており、担当者で会議を開催するだけでも1日がかかりになっている。そのため、電話やメール以外での頻繁な相談などは困難である。これらを短縮させるために、NPO法人あきた地域資源ネットワークが文部科学省の委託を受けてICT活用によるオンライン会議の開催などのシステム構築を模索している。この取組みが進めば、地理的広域性による不便を大幅に短縮することが期待できるため、推進協議会としても積極的に協同していく。最後に課題Fであるが、楽しいジオツアーの開催やJGN各種事業の誘致、広報強化によるガイド依頼件数の増加、教育旅行誘致の促進などを通して、交流人口の拡大を図っていき、商品開発を促しながら地域活性化により寄与していく。



写真18 夏休みはあきたのジオパークで遊ぼう！



写真19
当地域のブース
で体験学習に参
加した子の完成
品

第13章 今後の目標と活動計画

ジオパーク活動の先進事例として、当地域の取り組みを積極的にアピールし、日本のジオパークを先導する役割を果たしていきたい。そのための第一歩として、平成28年度から予定されている日本ジオパークネットワークのブロック化において、東北ブロックをけん引していくことを目標にする。また東北域内のジオパークと連携して、構想地域のサポートを行っていく。それが結果として、東北地域のジオパー

クの質向上へ寄与し、日本ジオパーク全体への寄与となると考える。

同時に、当地域のジオパーク関連人口の底上げを図り、認定ガイド等によるジオパークガイド件数を増加させる。4年後の目標を年間4,000人に設定し、積極的な広報と活用を図りたい。

再認定後の4年間の主たる活動計画は第7表に示す。

第7表 今後の活動計画

	2016	2017	2018	2019
ジオパークの質の向上				
ジオストーリーの質を高める				
Webのリニューアル				
各種刊行物の充実				
基礎研究促進				
ジオサイトの保護・保全				
保護・保全に関する方法論の強化(法律で保護されないジオサイトの保全)				
見学環境の向上				
ジオサイトの教育的利用促進と質の向上				
拠点施設の充実(学習センター・干拓博物館、観光案内所)				
教育プログラムの拡充と周知(秋田県連絡協議会としても推進中)				
持続可能な地域活性化への貢献				
交流人口拡大への寄与(ジオツアーや大会誘致)				
経済活動への貢献(ジオツアー、ジオ商品)				
各種講演会・イベントの開催(ジオパークの魅力、ジオ人口の底上げ)				
ガイドの積極的活用と質の向上				
ガイドの品質の向上(スキルアップ講座や、ガイド養成)				
他地域のガイドとの交流促進(各種大会等への参加促進、交流事業)				
リスク管理の強化(保険の充実、安全対策)				
ガイドツアーの増加促進(広報促進)				
ジオパーク間連携の強化				
東北ブロックでの連携強化				
全国のジオパークとの交流促進				



写真 20 秋田住みます芸人さんと認定ガイド



写真 21 平成26年度ガイド養成上級講座受講者

第14章 まとめ

年に何度も行われる男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会と協議会事務局の勉強会の中で、あるガイドの1人から以下のような発言があった。「ジオパークの認知度向上には、草の根的な活動が欠かせない。まずは、ガイドが親戚や近所の人などにジオパークを広め、その魅力を伝えることが大切だと思う。」そうすると、他のガイドが「私は地区の町内会館にジオサイトの写真展示をしている。」と。このような草の根活動こそが、ジオパーク活動の根幹となり、ひいては日本のジオパーク活動を支えているのである。日本ジオパークの認定以後の4年間で少なからず、地域内にこのような声が聞かれるようになってきた。ガイド養成も含めて、このような人づくりができたことが最も大きな成果であると感じる。ジオパークの取組みは行政が中心とはなっていない、行政のかじ取りだけでは衰退していくことが、過去の事業の事例からも明らかであり、それに携わる域内の住民の評価ややる気があるからこそ持続的に長続きする事業となる。これまでの取組みによって、まさにその花が咲き始めているといっても過言ではない。

さらに、教育委員会で所管するジオパークとして、

地球科学的な遺産と人を結ぶ仲介役に、文化財や地域の歴史、文化、行事、食、自然なども交えてより魅力的なジオストーリーの構築を行っている。また、学校教育へのジオパーク活動の使用も一定の評価を得て、毎年継続して訪れる学校も多くなってきた。また、保全においても、各種法令をうまく援用して開発行為等によりジオサイトが壊される恐れは、ほとんどない状態まで進めてきている。ジオパーク運営については、市村ともに教育委員会が中心となり、担当者レベルでは、自分がどちらの行政職員であったかわからなくなるくらいまで連絡を取り合っている。そして、県内のジオパークの連携も進め、個々のジオパークの負担を軽減する事業も軌道に乗ってきた。これらは、世界ジオパークネットワークが提唱するガイドラインにも合致しており、次の4年間、そしてさらに4年後と、当ジオパークの質を向上していくための土台は既に形成されたものと考えている。

しかし、全国どこのジオパークでも一定の課題や問題点はある。それは当ジオパークも例外ではない。それらを分析し、より良い方向に進めるよう、継続的な質の高い取組みを推進していきたい。



写真 22 鵜ノ崎海岸ジオサイトでのクリーンアップ（H27.9.6 実施）